
懐かしい思い出

ルリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

懐かしい思い出

【Nコード】

N0542B

【作者名】

ルリ

【あらすじ】

この話はちせが中学生の頃にあった。おもいでの話です。

水族館

ちせ「わあああー!!」

ちせはバスの中ではしゃいでいた。

ちせ「アケミ見て見て海だよー」

私とちせはバスに乗って水族館に行く事になった。もちろんいいだしたのは、ちせであった。

アケミ「あんたねーはしゃぎすぎ、私らもう中学生なんだからさー」

ちせはそんな事を聞いてはいるはずもなく……

ちせ「アケミと水族館しょや」

アケミ「はあ」

アケミはちせがはしゃいでいる事をため息をして、無視した。

なんだかんだと言っている内に水族館に着いた

ちせ「すうーすうー」

ちせは寝息をたてバスの中で寝ていた。

アケミ「ちせ起きなよ、置いていくよ」

ちせはハッと目が覚めて辺りを見回した、するとアケミはお金を払ってバスから降りる途中だった。

ちせ「あつ、アケミ―」

ちせは慌ててバスを降りようとした

ちせ「あれ？」

ちせはカバンの中を手さぐりで細かくなにかを探していた

アケミ「ちせ、まさかあんたまた？」

ちせ「ごめんなさい」

ちせは泣きそうな顔でアケミに駆け寄った

アケミ「はあ―」

アケミはため息を漏らし自分のサイフを取り出した

アケミ「今度かえしなさいよ」

ちせは毎回、水族館に来るたびにサイフを落としていた。そして、アケミがお金を貸すという事があたり前になっていた。

アケミ「はあ―私、今月いつきにお金がピンチになったかも……」

ちせ「ごめんねアケミ……」

アケミ「まあここまできたんだから、楽しまなきゃ!!」

アケミは気持ちをきりかえて水族館の前まで来た。

アケミ「えー、っと私ら今年から中学生だから……」

水族館の入場料を看板を見ながらアケミは探していた。

アケミ「あつた!!」

中学生の入場料金をみつけて、さっそくお金をは払いにいった、ちせは暗い顔でアケミを見ていた。

アケミ「ちせ、もう起こってないから、そんな暗い顔しないで早く中に入ろう」

ちせは小さく頷いた。

<30分後>

アケミとちせは一通り水族館をまわった後、疲れてベンチに座っていた。

アケミ「大分まわったわね」

ちせ「うん」

ちせは水族館に入って機嫌がもとに戻っていた

ちせ「アケミ私ちょっとトイレに行って来るね」

アケミ「大か？」

ちせはそれを聞いた瞬間、ちせは顔を真っ赤になった

ちせ「そんなはずないしょや」

アケミはそんなちせをみて笑いながら答えた

アケミ「冗談よ、冗談」

ちせは顔を赤くしたまま下を向きながらトイレに向かった

アケミ「ちゃんと前むいてあるかないと危ないわよ」

ドンッ

時すでに遅かった、ちせは前にいた男性の人にぶつかって、両方とも倒れた

アケミ「大丈夫ちせ？」

アケミはすぐにちせに駆け寄った。

ちせ「うん」

アケミはちせが怪我がないか確認してから、男性の方をみた。

アケミ「すみません、大丈夫ですか？」

アケミがその男性に手を差し出した時だった。

???「その声はアケミだな……………」

アケミは驚いて男性の顔を良くみた。

アケミ「シュウジ!!」

その男性のしょうたいは同じクラスのシュウジだった

アケミ「シュウジなんかに誤ってそんしたじゃない」

シュウジ「なんでそうなるんだよ」

口喧嘩している間から声が聞こえた

ちせ「ごめんなさい……………」

アケミ「わぁーシュウジが泣かした」

シュウジ「なんで俺なんだよ」

ちせ「ごめんなさい……………」

アケミ「また!!」

シュウジ「だからなんで俺なんだよ」

ちせ「ごめんなさい……………」

キリがなかったので仕方なく誤ることにした

シュウジ「ごめんな、ケガなかった？」

アケミ「ほら、ちゃんと名前よんであげなよシュウジ」

ギクツとシュウジは気がついた、名前、名前……………」

アケミ「まさかしらないの？小学校の時ずっと同じクラスだったでしょや」

シュウジ「知ってるよ名前ぐらい……………」

シュウジは考えた……………」そして一つの名前を思いだした

シュウジ「確か、ち……………」ち……………」

ちせは目を輝かせながら聞いていた。

シュウジ「チカコ？」

全く違う名前がでてきた

アケミ「誰だよそれ？」

シュウジは慌てて考えなおした

シュウジ「思い出したぞ!!」

シュウジは深呼吸して、名前を呼んだ

シュウジ「大丈夫、ちせちゃん？」

ちせは少し笑いながら頷いた

この時はじめてシュウジとちせはお互いの名前を覚えた

運動会（競技を決める編）

水族館でシュウジと初めてあった……………

ちせ「シュウジ君……………」

キンコーン、カンコーン

授業が終わるチャイムが学校中に響いた

委員長「それでは、運動会の競技で誰がなにをするかは、これで決定です」

ちせが眠たい目をこすりながら目を開けた。

ちせ「うー」

寝ぼけながら自分が何をするかを確かめていた。

ちせ「!?!?!」

ちせは驚きもう1度、黒板を見直した

ちせ「あれ？」

黒板には、1500Mという一番ながい距離を走らないといけない場所にちせの名前があった。

ちせ「サク……」

委員長のサクラの名前をいかけた時……

サクラ「それでは終わります、キリツ、レイ」

サクラが号令をかけてしまった、ちせはポカンとした顔で黒板を眺めていた

アケミ「ちせ、あんたやるわね」

ちせ「えええっ」

ちせはおどおどしながらアケミの顔を見た

アケミ「いきなり、大きい返事ではいなんて言うなんてビックリしたよ」

ちせ「私そんなこといつてないしょや」

アケミはちせの顔をみながら言った

アケミ「まさかあんた寝ぼけてた？」

ちせが涙目でうなずいた

アケミ「バツカだー！！！」

その光景をみていたサクラがちせ達に近付いてた、サクラはメガネを掛けた背がちせと同じぐらいの女の子であった

サクラ「ちせさん!!」

ちせ「は……い」

ちせはとてもサクラが苦手だった、メガネをギラつかせながらこつちを見ていた。

サクラ「授業中に居眠りしてるから悪いのよ、いっとくけど変更はナシだからね」

ちせ「はい」

ちせは泣きそうな顔でサクラをみていた

サクラ「そんな顔してもダメだからね」

こうして、ちせは運動会で1500M走ることになってしまった。

続く

運動会（競技を決める編）（後書き）

少し遅くなりましたが、「懐かしい思い出」の続きです。

運動会（運動会当日）

パンパン

運動会がはじまる音がした、次の競技がちせのである1500メートルリレーだった。

ちせ「・・・・・・・・」

ちせはおどおどしながらあたりを見回していた、そんなちせをみたアケミが声を掛けた

アケミ「大丈夫だってちせ、私達がホロウしてあげるから」

ちせ「うん・・・」

ちせは自信なさげに答えた

リレーの順番は次のような感じになっていた

1 アケミ

2 アツシ

3 ちせ

4 シュウジ

アケミ「なんだかんだといって、ちせが1番、重要な場所にいるべさ」

アケミはシュウジのほうを見てため息をした

シュウジ「なんだよ？」

シュウジはアケミのため息をみて少し怒ったような感じで質問をした。

アケミ「なんでまたシュウジがアンカーなのよ？」

シュウジ「おれがしるかよ」

確かにシュウジは知らない、何故ならば順番を決めたのは全部サラだったからである。ちなみに順番の決め方かたは……

サクラ「アミダよ！」

女子生徒「そんな決め方だったんだ。」

女子生徒があきれた顔でサクラをみていた。

サクラは確かにしっかりと几帳面だが、変な所でめんどくさがりだった、競技をきめるのもサクラがほとんど独断で決めていた

アケミ「まあサクラだから仕方ないしょや」

アツシ「そういう問題なのか？」

放送「次は3年生の1500メートルリレーです。競技にでるひと

は準備をしてください」

そんな話をしていたら、放送がなった。

アツシ「ちせちゃん行くよ」

ちせ「うん・・・」

ちせは相変わらずガチガチになっていた

競技の場所について、アケミが走る準備をした。

先生「ヨーイ」

先生が耳をふさいで、銃を上にもけた

先生「ドンッ」

バンッ

銃声ともにアケミは走った

アケミ「う……………！」

アケミは元陸上部だったのでそれなりに早く、5人中、2人をぬきアツシにバトンがまわった。

アツシ「まかせろ」

アツシは前にいた3人をぬいて1位になった。

シュウジ「アツシの奴やるべや」

後もう少して1週という所でシュウジとアケミがちせの方をみた

シュウジ・アケミ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ちせ「う・・・・・・・・」

ちせは少しビクついてまだガチガチになっていた。それをみたアケミはシュウジの肩に手をおくと

アケミ「ガ・ン・バ・ッ・テ・ね」

1言で終了した。

アツシ「ちせちゃん」

アツシがちせにバトンをわたそうとした時

ちせ「あ・・・・・・・・」

ポト・・・

ちせがバトンを落としてしまった、それを慌ててアツシが拾いちせに渡した

ちせ「ご・・・ごめんなさい」

そうしてる間に2人にぬかれた

アケミ「ちせー今は走って」

アケミに言われてハッと気がついた、ちせは涙ぐんだ顔で走った

ちせ（ごめんなさい、ごめんなさい・・・）

走っている最中にちせは涙を流した

それをみている保護者の人や応援してるクラスが静かになった

ちせ（ごめんなさい、ごめんなさい・・・）

ちさは心のなかで必死に誤った

ちせ「あっ・・・」

ちせは躓き転んでしまった

ちせ（もういやしょや、走りたくない）

ちせがことんとずっと蹲っていたら、誰かの声が聞こえた

???「・・・ちや・・・ん」

ちせ（誰だろう？あたたかい・・・）

ちせが顔を前に向けたらそこにいたのは

シュウジ「たてるか？」

シュウジだった……

ちせ「シュウジ君……」

シュウジは足をみて血がでてるの確認した、シュウジは後ろにむいて赤くなった顔でいった

シュウジ「おんぶするからくるべや」

それを聞いたちせはポカンとしていた

シュウジ「早く」

ちせ「うん」

ちせはシュウジの背中におんぶしてもらった

シュウジ「よし」

そいとうとシュウジは走りだした

いつのまにかまわりは

観客「ガンバレー」

みんな応援していた

ちせ（なんかはずかしけど暖かい……ずっとこうしていたい・
・・）

放送「ゴール」

放送席の声とともに2人はゴールした。

結局、順位はというと最下位だった……

しかしちせにとっては最高の順位だった。

ちせ「ありがとう」

シュウジはまたあかくなっていた

シュウジ「……………」

桜が適当に決めた順番だったが、これがなかったらちせは……

ちせ（シュウジ君……………）

真っ赤になりながら心のなかでかんがえていた

ちせとシュウジはお互いを好きにはなれなかつたのかもしれない

告白（前編）

運動会が終わりしばらくたった日

授業中

ちせ「・・・・・・・・」

ちせは机の椅子に座って運動会の事をふりかえっていた。

シュウジ「立てるか？、おんぶしてやるからくるべや」

ちせ（暖かい・・・）

????「・・・・・・・・さん」

ちせ「・・・・・・・・」

????「何ぼーとしてるんべや」

ちせ「えっ？」

ちせは驚いた

先生「教科書１２ページですよ」

ちせ「あっ・・・はい」

ちせは慌てて教科書を持ちそこにページを読む

ちせ「僕は君の事が好きだ、私も……」

クラス全員がシーンとなった

アケミ「バカ」

ちせ「あっ」

慌ててとったのは教科書じゃなく少女コミックだったそれに気がついたちせは顔を真っ赤にして教科書を取り読みなおした。

アケミ「ふー」

アケミは小さくため息をした

「昼休み」

アケミ達と一緒に弁当を食べている時だった

アケミ「ちせ最近なんかへんよなんかあったんしょや？」

サクラ「なにになにもしかして、好きな人でも出来たの？」

サクラが悪ふざけでいうとちせは顔が赤くなった

サクラ「ふーん、どうやらこれは凶星みたいね」

サクラが笑いながらいうとさらに顔が赤くなった

アケミ「まあまあサクラあまりちせをいじめずに」

アケミがフォローをいれるとちせが小声で話し始めた

ちせ「なんかよくわからないんしゃ」

アケミ「えっ？」

ちせ「なんかその人の事かんがえと・・・・・・・・」

ちせは言葉が続かずまた顔が赤くなった

アケミ「これは重症だよ」

サクラ「だれだれ？ちせが好きな人」

ちせ「う・・・・・・・・」

ちせは完全に沈黙してしまった

アケミ「まさかシュウジ？」

その名前がでた瞬間にちせは小さくなってしまった

アケミ「あんなバカどこがいいの？」

ちせ「・・・・・・・・優しいと・・・・・・・・」

アケミとサクラはそれを聞いた瞬間ビククリした

アケミ「ならはやく告白しないと」

なんでそうなるのか謎だった

アケミ「あんた度胸ないんだから腕試しでいってみなさいよ」

ちせ「えっ・・・え??」

ちせはなにがなにやらわからなくなっていた

アケミ「ほらほら頑張つて、明日かならずいいなさいよ」

ちせ「・・・・・・・・」

いきなりいわれても混乱するちせだった・・・サクラは何故かすねていた・・・そんな昼休みが終わりついに下校の時間になってしまった

（下校）

アケミは部活の用事でしばらく帰れないのでちせは一人で帰っていた、その時だったサクラが目の前にたっていた

サクラ「あなた本当にシュウジ君に告白するつもり？」

何故かサクラは怒っていた

ちせ「……………」

サクラ「私は……………」

その後続く言葉にいやな予感がした

サクラ「わたしはシュウジ君が大好きなんだから……あなたとちがつて大分前から好きだったんだから!!」

ちせはそれを聞いた瞬間なみだがでた

サクラ「泣いてもしかたないんだから」

いつものサクラがすごく怖くみえた

サクラ「私だってあした告白するんだから」

その言葉をいいサクラ走っていった

ちせ「ごめんなさい……ごめんなさい」

ちせはそのまま泣きじゃくっていた……………

続く
△告白（後編）
▽

告白（前編）（後書き）

おひさしぶりです時間があまりなかったので急ぎ足で書いてしまいましたすみません、この話だけは完結しておきたい作品だったので・
・ゆっくりですが次の話もがんばります

告白（後編）（前書き）

懐かしい思い出の最後の話です。今回はある映画で登場したキャラクターもいれて話を書きました

告白（後編）

夕焼けが沈みそうな時間ちせは公園で一人なやんでいた

ちせ「・・・・・・・・・・」

< 1時間前 >

サクラ「わたしはシュウジ君が大好きなんだから・・・あなたとちがつて大分前から好きだったんだから!!」

1時間前サクラにいわれた事を一人で公園のブランコに乗りながら考えていた。

ちせ（どうすればいいのかな？）

ちせが一人で考えてるといきなりだれかの声が聞こえた

???「わあああああ!!!!」

その女の人は後ろから転がって現れた、そしてブランコにぶつかって止まった、それをみたちせは涙を拭いてその女の人にちかづいた。

ちせ「大丈夫ですか？」

女の人は頭をおさえながらおきあがった

???「いたたたた」

その人をよくみると背が高く20〜30才ぐらいの女の人だった

???「ここは今なんねん？」

ちせ「へ？」

ちせはその質問に驚いていた

???「あつ、ごめんごめん私は真琴っていの」

ちせ「あ……はい」

ちせはまだ頭の中がボーっとしていた、そうしてるとまた自然に涙がでてきた

真琴「へ？私なにかした？」

真琴は慌ててちせに質問した

ちせ「ごめんなさい・・・ごめんなさい」

真琴もどうすればいいのか戸惑い、とりあえずおちつくまで一緒にブランコにのっていた

ちせ「私はちせです」

やっとなきやんだが、またいつでも泣きそうな顔だった

真琴「・・・ちせちゃんね、なにかあったの？」

年上の人に話しやすいのか、ちせはゆっくりと帰り道にあったことを真琴にはなした、話が終わると

真琴「なるほどね」ちせちゃんはどしたいの？そのシュウジ君が好きなんでしょ？」

ちせ「でもサクラちゃんのほうが早く好きになっていたんだし・・・」

真琴はそれを聞いた瞬間、ちせにはなした

真琴「ちせちゃん恋つてのはね、好きになったのが早いとか遅いとか関係ないのその人をどれだけ好きなのかよ」

ちせ「でも……」

ちせはうずくまった

真琴「私もね昔ともだちにね好きって告白できなかったの」

真琴の昔話がはじまり、ちせは顔をあげてその話を聞いた

真琴「その人はね私が告白する前に遠い遠い所にいつちゃたの……
……その時はものすごく後悔しちゃたな」

あらためてちせの顔を真剣にみてはなした

真琴「だからね、ちせちゃん告白しないで落ち込むより、告白してからのほうがまだスッキリするよ」

ちせはブランコをおりて立ち上がり

ちせ「うん……やってみる」

真琴「うん、あたってくださいろよちせちゃん」

ちせ「うん」

ちせは真琴にお礼をいいその公園を後にした、辺りは真つ暗になっていた

真琴「私もがんばらないとね」

真琴はおもいつきり走りジャンプした

真琴「いつけーーーーー」

その瞬間、真琴は消えた

<次の日>

下駄箱の近くにちせとシュウジはいた、ちせはガチガチになっていた、そしてその後ろにはいつものメンバーが応援していた

ちせ「あの・・・シュウジ君」

ちせは真っ赤になりながらいった

ちせ「好きです、つきあって下さい」

シュウジもまた顔が赤くなった

シュウジ「うん・・・」

そのそばでみていたサクラがいた・・・・・・・・

ちせもシュウジも顔が真っ赤になっていた

サクラ「おめでとう！！ちせさん」

サクラに気がついたちせは驚いていた

サクラ「私があればいいちせさんにいわないと絶対に告白しないと思ったから、昨日はごめんね」

ちせは首を横にふった

アケミやその友達もあらわれおめでとうとちせにいった

ちせ「うん、みんなありがとう」

サクラはそっと1人教室にいった・・・その時サクラの目から涙を流していた

『もしも水族館でシュウジあっていなかったら．．．．．もし運動会で転ばなかったら．．．．．もしあそこで真琴にあっていなかったら．．．．．』

こんな偶然がもしもなかったらシュウジとちせは付き合わなかったかもしれません．．．．．

【おまけ】

真琴「やっと会えた．．．．．」

目の前には背の高い男の人がたっていた

「????まさかお前がこのタイムリープを開発するとはな」

真琴「絶対に走っていくっていったでしょ」

「????」そうだったな……………」

真琴は顔を真っ赤にして話した

真琴「千昭……………私ね千昭の事が……………」

終わり

告白（後編）（後書き）

懐かしい思い出がなんとか連載終了しました・・・みなさん気がつきましたか？『時をかける少女』から少しストーリーをいれてみました、あの映画からその後という感じで書きました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0542b/>

懐かしい思い出

2010年10月9日11時51分発行